

今回は、関高校の「総合的な探究の時間」についてお伝えします！

◇ 「総合的な探究の時間」とは？

学習指導要領改訂によって、これまでの「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変更されます（関高校では2019年度より先行実施）。文部科学省は探究活動を「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動」と定義しています（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的探究の時間編』2018）。

探究活動はおおむね、①課題設定、②情報収集、③整理・分析、④まとめ・表現の4つのプロセスを経て進められます。こうした活動を通じ、生徒は、課題発見・解決力、コミュニケーション力、表現力、主体性・協調性といった様々な能力や資質を身に付け、同時に自己のキャリア形成に役立てるのが「総合的探究の時間」の目標です。

◇ 関高校の「総合的な探究の時間」 ～ 週1回、全員で取り組む授業 ～

2014年4月、岐阜県スーパーグローバルハイスクール指定を受けた関高校では、週1時間の「総合的学習の時間」をSGH活動の時間に当てることとしました。当初は個人による研究を実践しましたが、現在では、グループによる活動（課題解決型研究）を1年生、2年生ともに推進しています。

1年生は「SDGsとまちづくり」を、2年生は「SDGsの実現に向けて」を共通テーマに、各クラスで結成したグループを単位に、1年間の活動を続けます。各々のチームが独自のテーマを具体的に設定し、書籍・ウェブ情報等を通じてのリサーチ活動や、夏季フィールドワークを行います。さらに討論を通じて課題解決の道を探り具体的な提案にまとめあげます（右写真、1年生の様子）。



この間、レポート、口頭プレゼン用スライド、ポスターといった成果品を製作し、各クラスにおける代表選考会を経て全体発表会も行います（昨年度は感染症対応のため中止）。最後に、1年間の活動を振り返るアンケート、ルーブリックによる自己評価も行っています。

関高校で実施する課題解決型研究は、「社会を生き抜き、自己実現・社会貢献するために必要な力」、すなわち基礎的・汎用的能力の習得を主目的とするものです。関高校では、こうした汎用性のある力を身に付けるためのプログラムを実践するとともに、同時に「未来創造」「さくら塾」「リサーチツアー」など、個人のキャリア形成を支援する機会も設けています。

前掲の新指導要領（2018）では、「課題を設定し、解決していくことで、自己の生き方を考えていく」ことを目標とした「総合的な学習の時間」に対し、「総合的な探究の時間」の目標を「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく」と定義しています。課題解決型研究をメインに、個人のキャリア形成支援に関わるプログラムを同時に実践している関高校のキャリア教育のコンセプトは、新指導要領の理念と合致するものと言えます。

◇ 希望者対象の探究活動 ～ アウトリーチとフロントランナー ～

「総合的な探究の時間」は週1回の活動です。生徒は限られた時間の中で、チームビルディングから成果発表まで様々な活動を体験します。「課題解決の具体的提案づくり」をゴールとしていますので、具体的な実践活動までには及びませんし、時間的制約もあるので研究内容を深めていくことにも限界があります。

ただ、中には、「地域と連携し、具体的な活動実践を行いたい」「発表交流会や学会、コンクールの場で、活動成果を聞きたい」という生徒たちもいます。関高校では、啓発活動やボランティアなどを通じて学びの成果を地域に還元する活動を「アウトリーチ」、学会やコンクールなどに参加し成果を問う活動を「フロントランナー」と呼び、参加を奨励しています。

アウトリーチでは、関市と連携したLGBTシンポジウムや「せきの未来・社会貢献プロジェクト」など、フロントランナーでは各種コンテストや学会への参加を支援しています。

◇ 探究活動はなぜ必要か、効果はあるのか？

探究活動の本格的導入によって、日本の教育が大きく変わろうとしています。これは日本だけではなく、OECD（経済協力開発機構）によるキー・コンピテンシーの概念の発表、PISA型学力調査の開始（1997）にみられるとおり、ここ20年来の大きな世界的潮流とみて間違いありません。高校までの探究活動で身に付けるべき諸能力・資質は、大学進学後の研究活動、あるいは実社会での様々な活動に役立つものとして、大学や企業、行政機関等、各方面からの注目と期待を集めています。

まさに「待ったなし」で始まった探究活動ですが、このような流れを加速させた調査結果が、全国の小中学校（小学校20,327校、中学校12,120校）を対象とした「[全国学力・学習状況調査](#)」（国立教育政策研究所 2015）であると言われてしています。この調査報告レポートによれば、「自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れた」学校の方が、国語、算数（数学）、理科といった各教科の正答率が高いという分析結果が得られたそうです。

大変興味深いデータ分析結果ですが、探究活動で習得すべき諸能力・資質は、教科の学力テストやスポーツテストとは異なり、「可視化」「数値化」が困難な分野ですし、短期では結果があらわれにくいという側面もあります。学力テストやスポーツテストでは、失点・失敗はマイナスとして評価されますが、探究活動では「失敗」「挫折」もまた得難い体験であり、あとになってその体験が「成功」「飛躍」につながるというケースもあります。

探究活動の成果に関しては、小中高の連携、関係機関の連携で、きめ細かい支援を続けながら、長期的プランに基づく評価を行っていくべきと考えます。その意味では、いよいよ始まるキャリア・パスポートや、すでに実施されているポートフォリオの有効活用が、大きな鍵を握ると考えられます。

◇ キャリア・パスポート、eポートフォリオとは何か？

2020年4月から、全国一斉で、キャリア・パスポートが導入されます。文部科学省は、キャリア・パスポートに関し、「小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通りしたり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながるもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導・支援に資するもの」と定義しています。キャリア・パスポートは紙ベースで作成されるものであり、その内容は、学習、特別活動、部活動、探究活動、キャリアプランニング等、多岐に渡ります。

一方、eポートフォリオとは、ポートフォリオをデジタル化したものを指します。ポートフォリオ（portfolio）とは本来「書類を挟むファイル」のことを意味し、学校では児童生徒の学習成果、学びのプロセスに関する記録を集めたファイルのことを指します。関高校ではすでに、ポートフォリオのデジタル化、すなわちeポートフォリオの作成を、生徒一人ひとりが進めています。

eポートフォリオ、キャリア・パスポートともに、生徒一人ひとりの活動履歴書であり、大学進学後さらには実社会に出たあとの計画書としての役割を果たします。「総合的な探究の時間」で行う課題解決型研究や、アウトリーチやフロントランナーなどの発展的活動にしっかり取り組めば、中身のある活動履歴が書けますし、将来設計に向けた準備にもなります。